

こどもの城

こどもの城 活動事例集

親子ふれあい体操
"1・2・3"

スポーツで心身ともに健康な生活を

こどもの城体育事業部の事業概要



神経系の発達の著しい幼児、学童期は、運動面で基本から応用へと幅広く体験していきたい時期となります。柔軟性、平衡性や筋力など、基礎的な体力は遊びを通して自然に獲得していけることが望ましく、それらは、スポーツという中で洗練され、それぞれがたくましさを増していくこととなります。みんなでここにこ、わいわいしながらからだを動かす楽しさが、自分の持っている最善を出すことへの興味や魅力へとつながっていきます。そうした変化を子どもたち自身に感じてもらいたいと願っています。

スポーツは実に個性的です。相撲のように「超」がつくほど体重が必要なものもあれば、新体操のように今にも折れそうなほど贅肉の少ないことが要求されるものもあります。ゴルフ、洋弓やライフルのように息切れした状態ではできないものもあれば、マラソンやトライアスロンのように酸欠状態に陥るほどのものもあります。炎天下や厳寒の中、水中や雪上と環境もいろいろです。持っている感性を出すことが必要であったり、極めて考えられた戦略の中で成り立つものもあります。こうした多種多様な特性を持ったスポーツは、以下のように、子どもたちにさまざまなものを与えてくれます。

1. 安全確保への模擬体験
2. からだをつくる
3. 創造力を高める
4. 空間の認知
5. からだの認知

子どもたちに、運動やスポーツを指導する場合には、これらを考慮した上で、楽しみながら体験できるような指導方法が大切になります。



自分の持っているものを出し、発見する

体育館とプールを使って行う「講座」や「クラブ」では、子どもたちを継続的に観ていくことが可能なため、長期的な展望の中で健康を考えています。子どもの成長をしっかり見ながら、その時期その時期に必要なものを無理のない指導の中で体得してもらうのです。指導者が教え込むのではなく、子どもたち自身が「感じ」「考え」「試す」ことであり、指導者に必要なのは、子どもたちの持っているものを引き出してあげ、発見してあげることでと思っています。このことを基本に、質を高め、更にはからだへの負荷を上手にかけることで量の確保もしていくことが大切だと考えています。また、運動は軽く走るだけでも時間によっては苦しくなり、硬いからだを曲げるだけでも辛いものだけに、そこには努力が必要となります。精神的な強さを獲得させることも大切なことです。従って、以下のようなことを考えながらの指導が大切となります。

1. 動くことの楽しさを知らせる
2. いろいろなスポーツにふれる
3. 全力を出す機会をつくる
4. 個性を大切に

だれもが参加できる体育活動

さて、こどもの城の体育活動も開館以来の年月の中で、多くの人たちの積極的な参加がみられるようになってきました。母親からなかなか離れられず動かない子どもを励ます姿、今にも泣きだしそうな顔をしてうつむきかげんに、とぼとぼとやってくる子どもや、待ってましたとばかりに一目散にやってくる元気な子どもなど、来館風景もさまざまです。対象も幅広く、幼児・学童を中心にマタニティの母親や0才児の赤ちゃんから高齢者までを扱っています。どちらかという、運動を苦手としている子どもが多いようですが、からだを動かす楽しみを知り、運動やスポーツを一生のものとして付き合ってもらいたいと思っています。



こどもの城活動事例集 親子ふれあい体操"1・2・3"

発行 こどもの城
編集 体育事業部
 動くこどもの城事務局
住所 東京都渋谷区神宮前 5-53-1
イラスト たはらともみ
デザイン キムラオフィス
印刷製本 (株)エフ・アイ・エス
発行日 平成21年3月20日

親子の体操について

スキンシップの重要性

まだことばを発することができない乳児でも親がからだを触ったりすることで子どもは安心感をおぼえます。泣いている子どもは抱きかかえたりなでたりすると泣きやんだりします。体温が伝わったり、子どもを見る視線だったり子どもは敏感に察知し不安を取り除くのです。しかし、根底にあるのは愛情であることはいまでもありません。

ハイハイからおぼつかなくても歩くようになった子どもは歩くとき自然に親の手を握ってきます。確かに歩行訓練中の子どもにとっては、バランスが悪く不安がつきまとう自分自身が手を握ることで安心して踏み出す一步一步がこれからの巧みな動きにつながっていきます。自分でしっかり歩けるようになると、親が手をさしのべても手を握ることはなくなっていきます。しかし、このように一人前になるには手を握って歩いた過程がないと成立しません。

親の関わり方

子ども達の心身の発達を考えると、特にこの時期は、発達に合った幅広い体験が必要になってきます。それは、子ども達にとってこの時期にしか吸収することのできないものがたくさんあるからです。先にも述べましたように親の愛情もしかり、たくさんからだを動かしたり、子ども同士との関わりなどさまざまです。このような体験は、特別に与えられたものである必要はなく、遊びのなかで自然に体得していくことが望ましいと考えられています。すなわち、親子でたくさん遊ぶことがこの時期に最も必要になるわけです。このペースがあって、近い将来、親の手から離れ、子ども達同士遊ぶことにつながっていくわけです。

一緒に楽しもう

親子で体操(運動)するにあたって、親は傍観者にならないことです。子どもは昔から親の背中をみて育つと言われます。運動においても同じことがいえます。また、子どもは親の鏡とも言われるように親も表情ややる気を子どもは早急に察知し自分の行動に移そうとするわけです。

この時期は「真似をして行動する」といわれています。親をよく観察し、知らず知らず親を真似して、自分の行動パターンに反映していきます。ですから、親にとって、子どもの遊び(運動)をサポートすることと同様、自分自身が夢中になって取り組むことが必要になってきます。

親の参加には子ども達同士で遊ぶことができないエッセ

ンがあります。親はもちろん大人ですから体力もあり、からだも大きい。子ども同士で持ちあげたり引っ張ったりすることは容易ではありません。しかし、相手が親となるといともたやすく肩の高さまで持ちあげたり、両脚をひっぱり逆立ちをさせることは容易くできます。このような運動はこの時期しかできません。いくら体力に自信がある親でも小学校高学年の子どもを持ちあげることは不可能の領域にはいつてきます。ですからこの時期にダイナミックにやってみることで。また、子どもの体重の負荷を利用し運動することで親もまた日頃の運動不足の解消にもなり一石二鳥となります。

良いことばがけ

幼児の運動発達には開きがあります。2歳なりたての子と2歳半の子の運動発達は大いにちがいます。できる、できないで判断することはとても危険です。「他の子には出来てうちの子はできない」など思いがちですが、その時期になれば出来るようになるものです。そこで一番良くないことは子どもに対することばがけです。「なぜ、こんなの出来ないの」「しっかりやりなさい」など子どもにとってマイナスのことばがけは子どものやる気や能力を止めてしまうことになりかねないでしょう。また、親の機嫌を損なわないように無理をしてやり、本来もっている運動の楽しさも感じなく、運動嫌いになってしまうことも考えられます。

「いいぞ」「あと、もうすこし頑張れ」など子どもにとって希望が持てることばやプラスに考えることばをかけてやるのが大事です。そして、出来たときは親も一緒に喜び誉めてあげましょう。大人も誉められて悪い気はおきないものです。

親子の距離

親と子が一緒にあそぶことの大切さはこの時期に必要なことはのべてきましたが、時期、時間は限られています。この幼児期は家庭から社会への移行する時期でもあります。親子が一緒にあそぶことを基本とし、時には親子の距離を離して、子ども達同士で遊ぶ場面を作ることが必要になってきます。実際、少子化の現代である日本ではむずかしいところがありますが、親の友達の子もなど、まわりを見渡し子ども達同士の環境づくりも親の仕事といってもよいでしょう。

親子の距離をもつということは、「子どもの親離れ」ではなく、子どもの自主性を少しづつ尊重するという「親の子離れ」のほうが重要なものかもしれません。

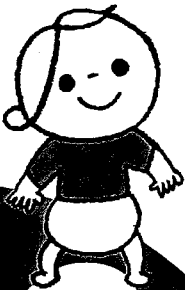
1歳児の運動

この時期になると、そろそろ熟練してきた「はいはい」も影を潜め、移動手段として立位が主流となってきます。その場でじっとしているだけでも、今にも尻餅をつきそうなくらい、不安定に立っている姿が見られますが、その顔つきは「こんなに上手に動けるよ」と自信に満ちあふれているようでもあります。

「はいはい」は、生活の中で自然に腕や背中の力をつけることができ、身体の方向転換やスピードの強弱も出せるという意味では、運動的にも優れたものです。かつて、有名なスポーツ選手が、赤ちゃんと同じ行動をとることに挑戦しましたが、数時間で音をあげたそうです。それほど運動量豊かなものなのです。この「はいはい」ですが、最近の住宅事情により、十分にすることなく、すぐに「つかまり立ち」が始まってしまう傾向にあり、これが子どもたちの運動能力に影響を与えているという指摘もあります。そういう意味でももう少しの間、「はいはい」を運動としてとらえ、親子で行なうことも必要なことなのかもしれません。

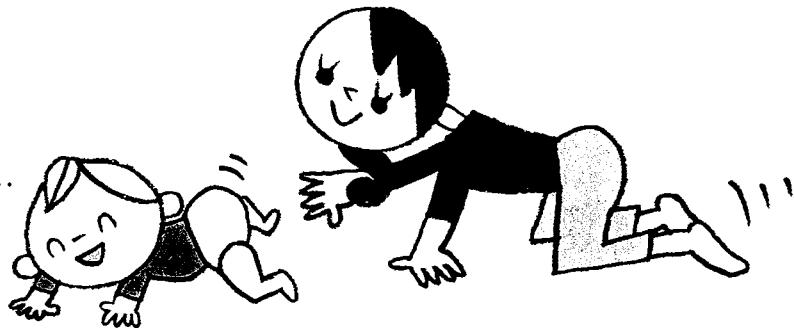
立つことができると、その視野は大きく変化し、まわりのものへの興味はさらに大きなものになっていきます。そして、その興味が歩行をはじめとする運動につながり、その経験を通じて基本的な運動能力が次々に身についていくのです。裏を返せば、まわりのものに興味が分散し、じっとしていないことから、生活の中でも母親の思う通りにいかないことが多く、ましてや、運動を一緒にすることは大変なことなのです。いざ体操をしようとしても、ことばで説明するわけにはいきませんから、いろいろと工夫が必要となってくるのです。

この時期の体操の基本的な考え方は、からだにそれなりの力を持たせることと、動きの楽しみを味あわせてあげることです。歩くことによって、身体は自然と力強くなってきますが、それだけでは不十分であり、適度にそれを補ってあげる必要があります。また、動くことへの意欲と好奇心は旺盛で、それをより運動的に膨らませてあげることは、とても楽しいことでもあります。実際には、子どもの関心のあるものや、行なっている運動を上手にアレンジしてあげること、または、子どもの関心を引きつけるような道具を利用することなどがあげられます。子どもは、母親にまわりついたり、「だっこ」をせがんだり、布団の上でゴロゴロ転げ回ったり、さまざまな行動をとりますから、面倒がらずに根気よくつきあうことが必要です。そして、それをもとにさまざまなアレンジを加えていくことによって、楽しい運動になります。



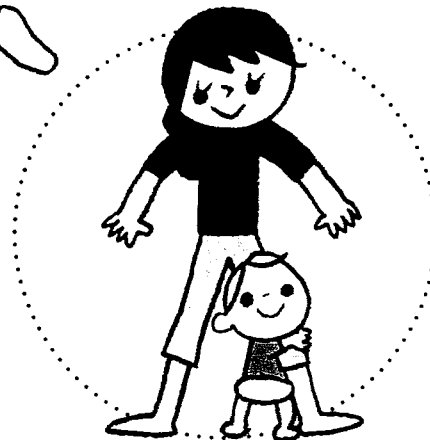
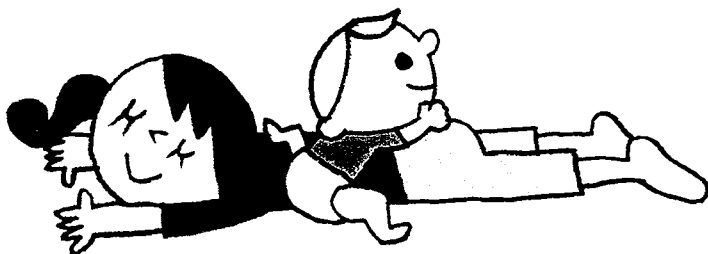
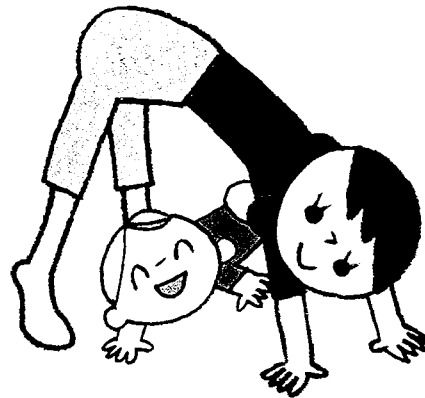
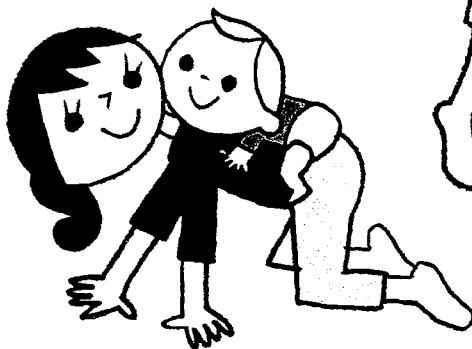
●ハイハイでおいかけっこ

ハイハイしている赤ちゃんを追いかけ、
赤ちゃんが横から逃げたら
また、追いかけてみましょう。



●登ったり、くぐったり

ハイハイしている赤ちゃんの
障害物になります。
赤ちゃんは登ったり、くぐったり
馬乗りになったり...
*歩いている赤ちゃんにも応用できる



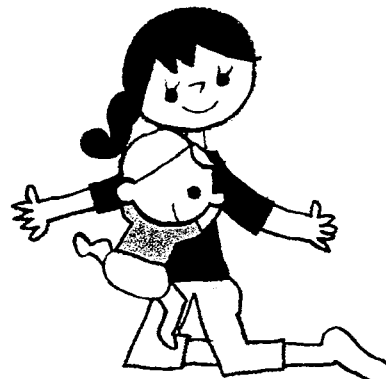
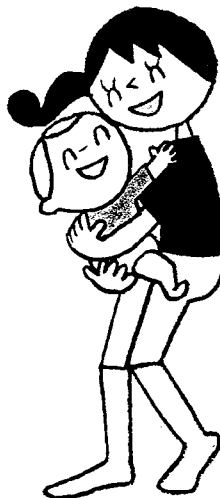
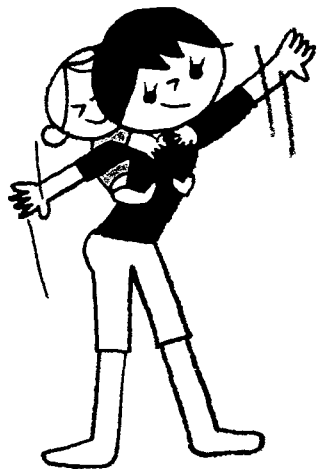
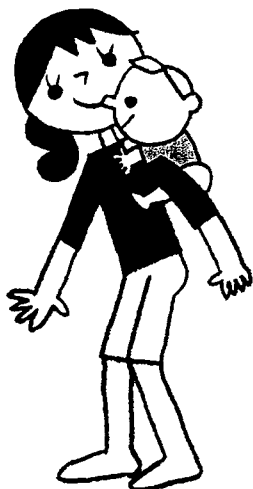
●木とおさるさん

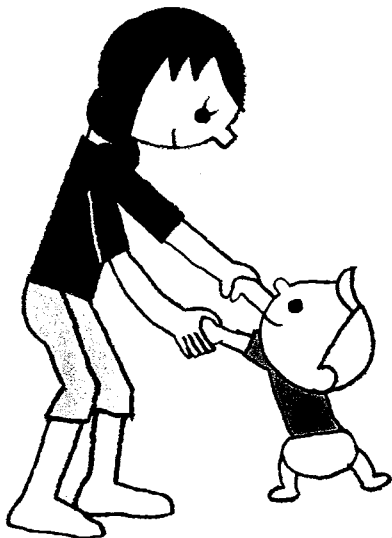
まずはおんぶ
しっかりつかむことができたなら
お母さんはそっと手を
はなしてみましよう。

風が吹いてきて
お母さんの木が
ゆれはじめたよ。

前にまわって
大好きなだっこ。

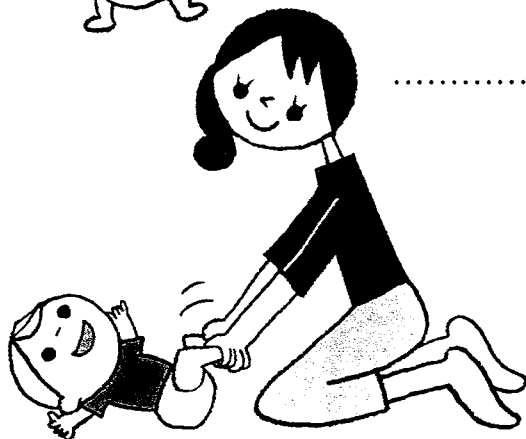
少し疲れて
おさるさんは木から
おりてきたよ。
おりやすいように
膝を曲げて。





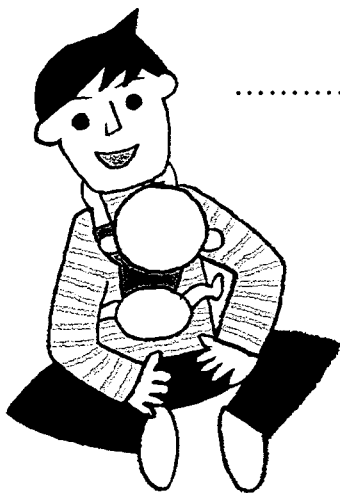
●親子で仲良くお散歩

- ①親子で手をつなぎ歩いてみます。距離をいろいろ設定して行ないます。
- ②片手ではなく両手をつないで横向きに歩いてみます。安定しているので変化をつけてみましょう。飛び跳ねるようにしたり、その子にあったものを工夫してみる事が大切です。



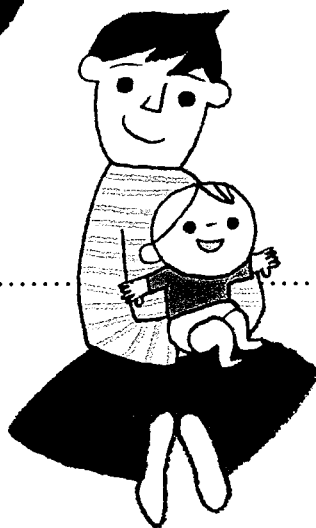
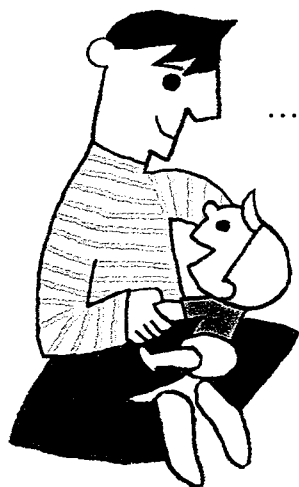
●床あそび

- ①床にあおむけに寝かせ、両足首をもち前後に行ったり来たりしてみましょう。押すときは膝を曲げて行ないます。次第に自分でつぼうとします。
- ②①の要領で左右に揺さぶりながら行なってみましょう。



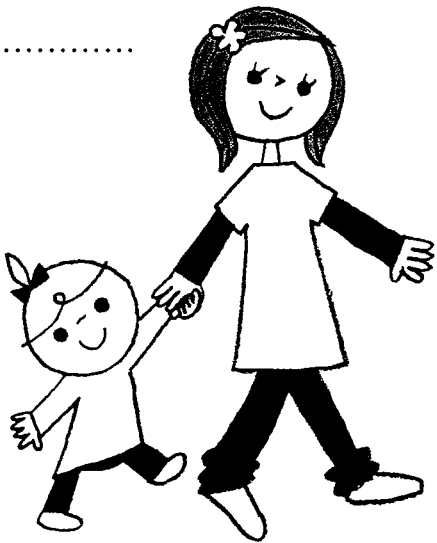
●抱っこでこんにちは

親(大人)は座った姿勢で子どもを抱っこします。子どもの手は親の首にからますようにします。脚は手と同様、親の胴にからますようにします。ゆさぶりながら、子どもの手や脚に力が入っている手ごたえを感じたら、子どもが手を離してもよいように背中あたりを補助します。(実際は背中にふれない) 親は「こんにちは」と体を前に傾けます。最初は手を離す子どもでも反復おこなっていると、つかもうとしてきます。



●抱っこでぶらんブラン

- ①向かい合って子どもを、あぐらをかいた脚と脚のくぼみに座らせませす。最初は支えて横に「ぶらんぶらん」、慣れてきたら体を支えず手をつないでやってみましょう。自分の力で起き上がれるようにします。
- ②①とは反対に、向かい合わず同じ方向を向くようにします。親は子ども的大腿部の裏を持ち、持ちあげて「ぶらんぶらん」。親は大変ですが空間認知能力を高めます。

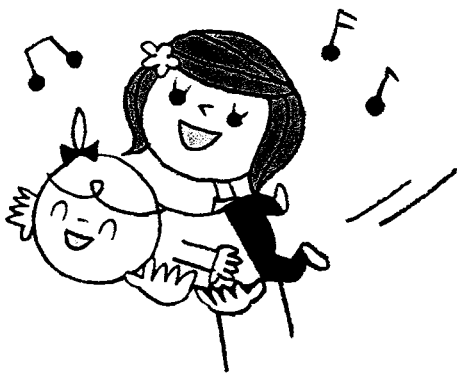


2歳児の運動

子どもとのコミュニケーションを楽しみながら、積極的に体操することのできる時期です。生活の中での行動も、母親泣かせなくらい活発になり、ことばによるコミュニケーションも飛躍的に進んでいきます。

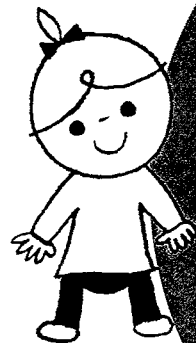
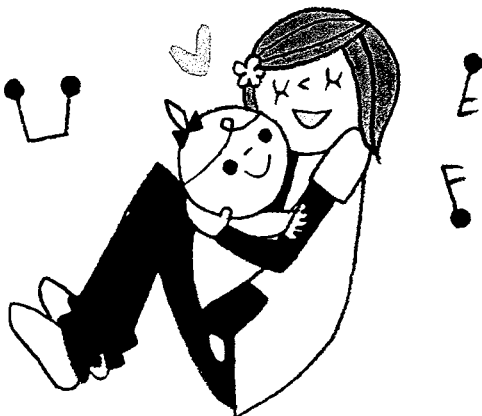
これまでも母親の模倣や、簡単なことばがけでさまざまな動きができ、親子で楽しめましたが、この時期は「バンザイ」でも、「あげる」「おろす」といったことばや、「力を入れて」「もっと腕をのばして」という動きを表現することばにも対応できるようになります。このため、動きのバリエーションも増え、体操として必要な動きを取り入れることができるようになってきます。

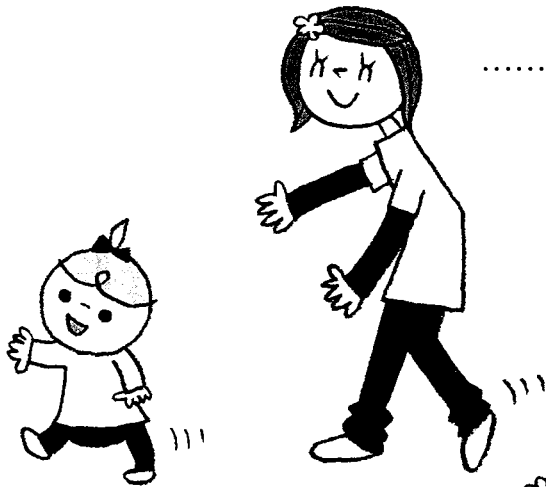
全体的には、走る要素を積極的に取り入れ、汗をかくくらいの運動量を確保していくことが大切です。また、外での遊びや、ボールなどの遊具を使った運動はたいへん有効です。ただし、子どもの体をしっかりと観察し、姿勢などにも注意を払う必要があります。



●音楽にあわせてスキンシップ体操

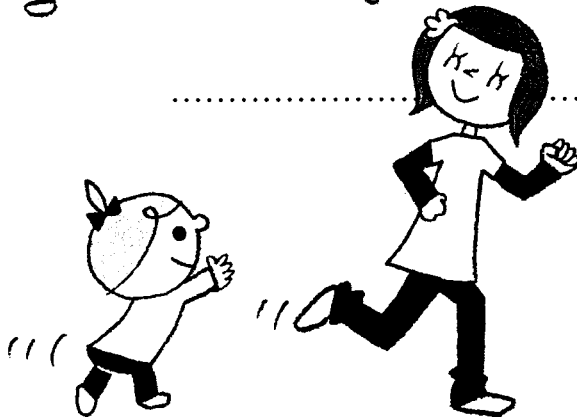
音楽にあわせ、スキンシップを大切にしながら体操することは、とても楽しいものです。好きな音楽をかけて、レッツ・スキンシップ！





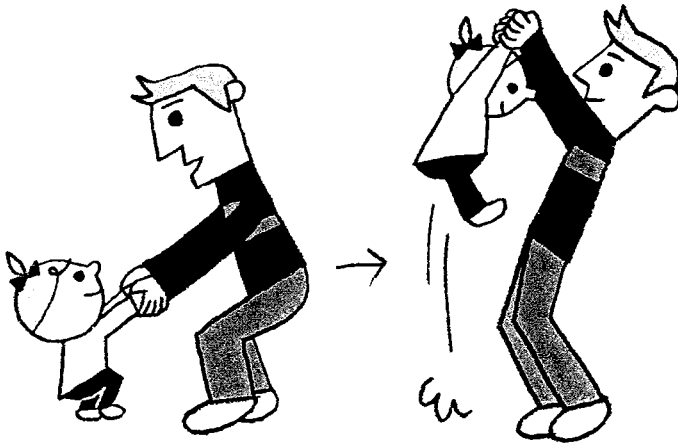
●まてまて——走行

2歳月齢の幅はありますが、歩くことに関しても、手が体側において振って歩くようになってきます。また、膝の動きも軟らかくなり、腕の振りと供応して「走る」まではいかないにしても、スピードが出てきます。子どもの顔を見るとさっそうと嬉しそうな表情が印象的な時期です。積極的な移動手段を覚えた子どもは、親から離れようとしています。「そっちにいつはダメ」と否定するのではなく、「まてまて〜」と追いかけてみます。十分な運動になるでしょう。安全なところで行なうのはいうまでもありません。



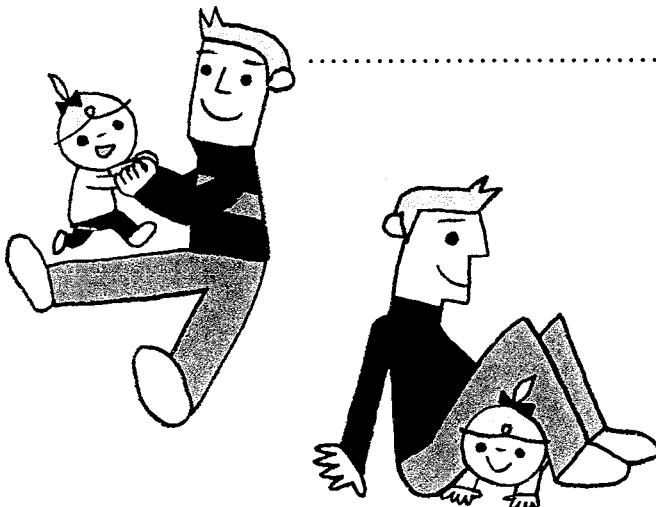
●親子鬼ごっこ

「まてまて〜」でも鬼ごっこの運動要素は十分ですが、「鬼ごっこ」としての形がある「あそび」を、経験としてやってみるのもよいと思います。まてまて〜で子どもを（タッチ）捕まえたら、こんどは親を捕まえにくるというルールを子どもに教えて遊ぶことは、これからのことも考えると有意義なことでしょう。



●親子ジャンプ

親（大人）は子どもと向き合って立ち、子どもの両手首を握ります。1・2の3でジャンプ！



●親脚ジャンプ

親（大人）は開脚に座ります。片方の脚をひっかからないようにジャンプ。うまくできたらもう片方の脚もジャンプ。両足のジャンプは、まだこの時期はおぼつかないので、ばらばらの足でジャンプしてもOKとします。月齢が低い子どもは、両手を握ったり、脇を親（大人）がもって（補助して）行ないます。

バリエーションとして

- ①脚を超えたら親の背中をまわって戻ってくる。
- ②脚を超えたら親は脚の膝を曲げ、山や、V字バランスを作り、這ったりクマ歩きで戻る。

●おっとと、バランスあそび

親(大人)は長座で座ります。太もも(大腿部)に子どもの脇をもって立たせます。そっと手を離してひとりで立たせてみましょう。自分で立つことができたなら親の脚を少しグラグラ動かしてみましょう。子どもは落ちないようにバランスをとりはじめます。次第に強弱をつけてみましょう。おぼつかない子は手を握ったり、脇を軽くもってあげます。

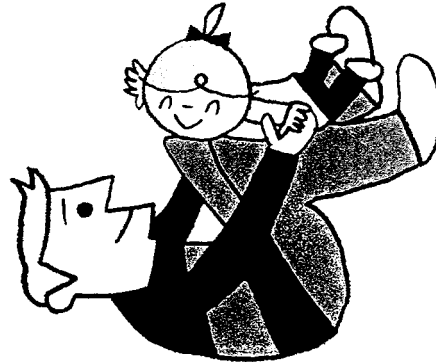
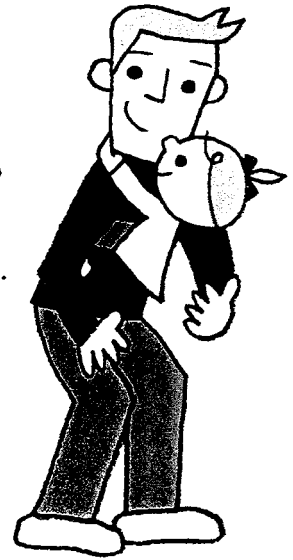
*自分で立てる子どもであっても落ちることを想定して、すぐ手が出るようにしておきます。



●おさるだっこ

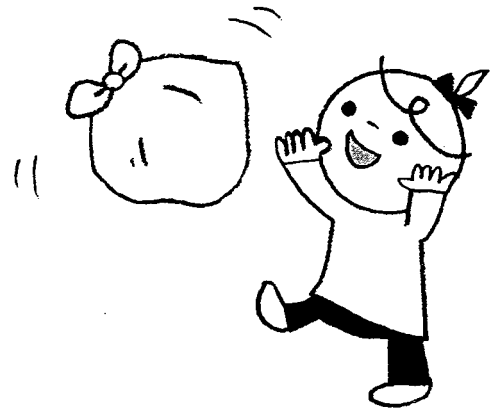
抱っここの姿勢をとりますが、子どもの手を親(大人)の首にかけます。しっかり首にかかっていることを確認したら、抱っこしている手を離します。最初は耐えきれず離してしましますが、数回行っているうちに力が入りづら下がるようになってきます。中腰姿勢から挑戦してみましょう。

*落ちることを想定してすぐ手が出るようにしておきます。また、最初は座って行なうのもよいでしょう。



●ヒコーキぶ〜ん

親(大人)はあおむけに寝ます。膝を曲げて、膝から下(すね)の部分に子どものおなかをつけ、子どもをもち上げます。手を握っても、親の手が子どもの脇を支えても、どちらでも大丈夫です。怖さが表情に出ていなければ、上下にゆさぶってみましょう。



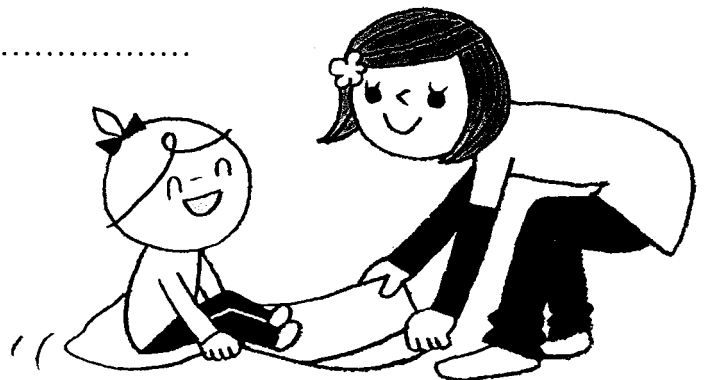
●スーパーの袋—ふわふわキャッチ

ビニール袋はとても軽く、空気が入り丸くなると落下スピードが遅くなります。その落下スピードを利用してあそびます。

とってのところをもち、フーと空気を入れてみます。と同時に手を離すと、ふわ〜と浮き上がります。袋が床に落ちる前にキャッチします。非常に簡単なことですが、子どもは喜んで捕りに行きます。

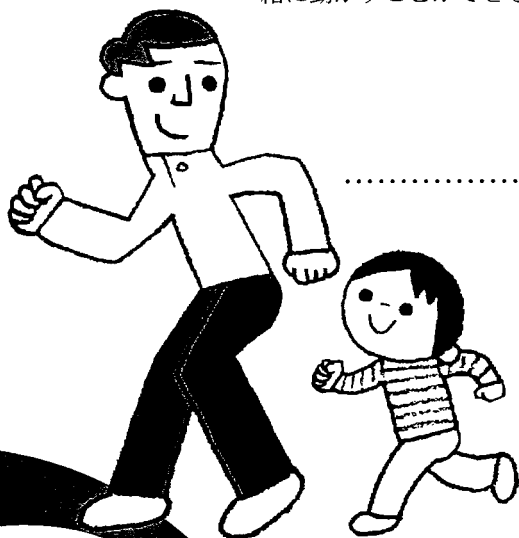
●タオル—魔法のジュータン

浴用タオルに子どもを長座の姿勢で座させます。2歳児の筋力は弱いため、お座りの姿勢から足先のタオルをひっぱると後ろにひっくりかえるので、座ったおしりの位置にあるタオルの両端を左右子どもが握るようにすると、後ろに倒れません。親が後ろ向きに進みます。フローリングの床でも畳でも滑ってあそべます。



3歳児の運動

2歳児とは違い、3歳児になると全ての発達段階において目をみはるようになります。なかでも、運動においてはさまざまな体力がついてきます（防衛体力、行動体力）。また、メンタルな面も急激な発達をみせるので、ことばで理解し、運動につながってくるのもこの時期です。特に走ることににおいては一人前の走りになり、単調な走行から複雑な走行になってきます。視野に入ってくる障害物を回避したり飛び越えたりしてきますので、簡単な「鬼ごっこ」は楽しむことができるようになってきます。理解力が急激に発達するので、集団であそぶ運動ゲームもできるようになります。ただ、単独行動から集団行動に移行する時期なので、同じゲームでも反復して行なうことが必要になってきます。また、体の部位を一緒に動かすことができるのもこの時期の特徴です。

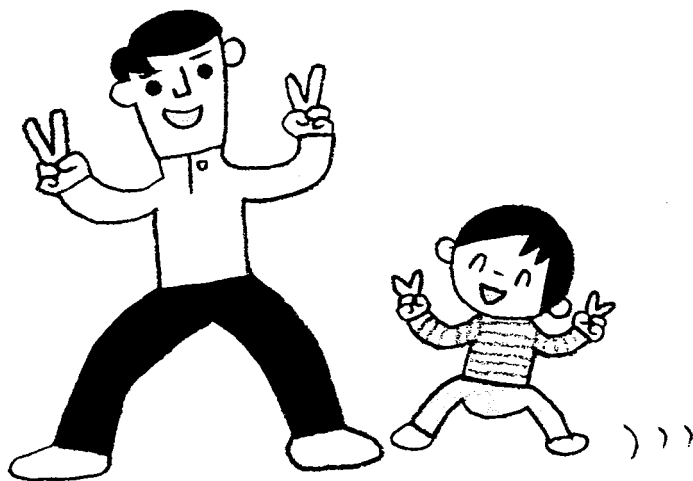


●いろいろな走り方

走力がついてくるので、2歳児のように「まてまて～」と言うことはなく、目的地を決めて走らせることが可能になり、「あの柱までお父さんと競争だ」と走ることもできるようになります。通常な走り方に加え、模倣で移動したり、ジグザグ走りや坂道を使った走りを取り入れてみましょう。

ex. クマ歩き（四つん這い）、カニ歩き（横歩き）、馬で走る、ヒコーキで走る

*スキップやスキップのまねごとができるようになるので、親（大人）がやってみせることが大切です。指導するより、見て感覚的に覚えさせることが大切です。



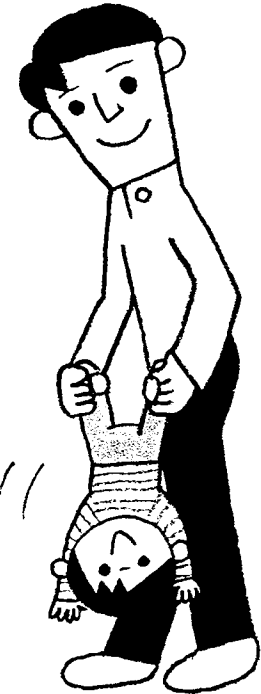
●いろいろなジャンプ

模倣運動でカエルとびなど、障害物なしでジャンプが容易にできるようになるこの時期、親（大人）が開脚して座り、その足を踏まないようにジャンプして親の後ろをケンケンで回ってくるなど、バリエーションをいろいろ考えていくと運動の幅が広がります。



●でんぐりがえし

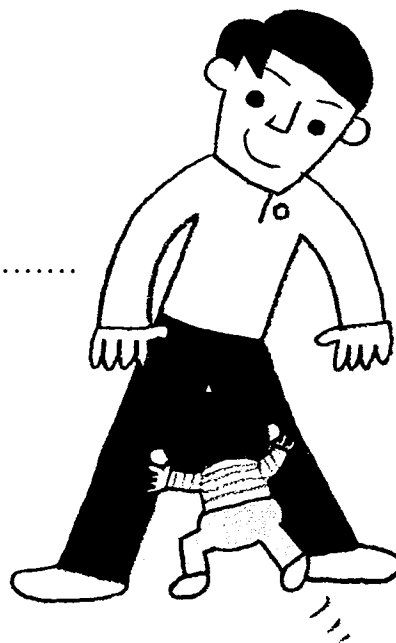
両手を握り、子どもは親の膝、大腿部、おなかの順に足だけで登り、くるっと回ります。最初は簡単にできません。親は、親指と人差し指で子どもの手首をもち、子どもの膝の後ろを中指、薬指、小指で持って回すことができるようになりますが、練習が必要です。子どもが自分でできるようになったら、親の体を使わないようにやってみましょう。この時期は空間をより多く使う運動が大切です。



●ひっぱり立ち

親（大人）はうつ伏せになっている子どもの両足首をもちます。ゆらゆら揺さぶってもち上げます。子どもは逆立ち状態になり、子どもの両手の掌が床に着いたら、そっとおろします。バリエーションとして仰向けの状態から行なうもの、手首をひっぱって起き上がるものがあります。

*ゆっくり動かすようにします。



●親股スクラム

親（大人）は股を子どもの頭が入るくらいに開きます。子どもは頭を入れ両手で親の脚をしっかりとつかみます。思い切り親を動かすつもりで押します。親は結構子どもに力があることに気がつくでしょう。



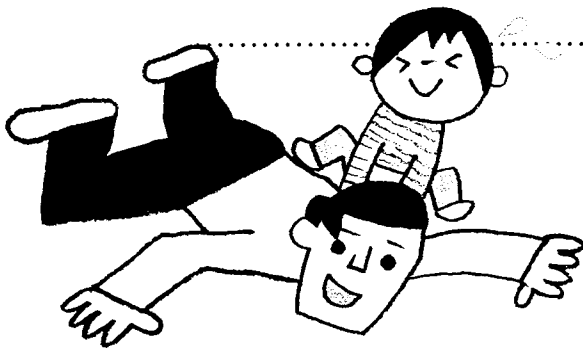
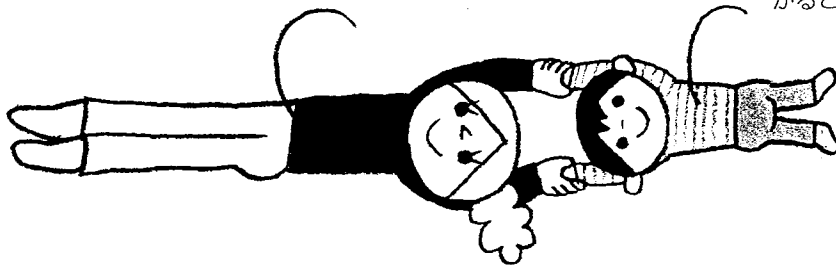
●座布団団体当たり

親(大人)は、座布団をおなかあたりに巻くようにもちます。子どもは座布団めがけて思い切り体当たりをします。頭からではなく肩から突進してみましょう。子どものストレス解消にひと役かいます。



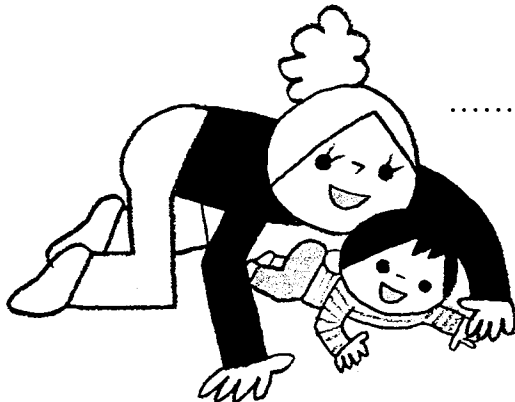
●ふたり芋虫ごろごろ

まずは一人でやってみます。手を合わせ、手から足先まで棒のようになります。体が折れ曲がって回らないように、おなかの力を使ってごろごろところがってみます。次に親(大人)とうつ伏せになり、頭の上で両手を握り、同じ方向にごろごろところがってみましょう。お互いの体をまっすぐに保たないと上手にころがることができません。



●カメおこし

親(大人)はうつ伏せになります。子どもは親の腕、肩、おなかをもち、ひっくりかえます。親は簡単にひっくりかえされないように多少踏ん張ります。最初は子どもをうつ伏せにして、親がやってみせると子どもは理解しやすいでしょう。



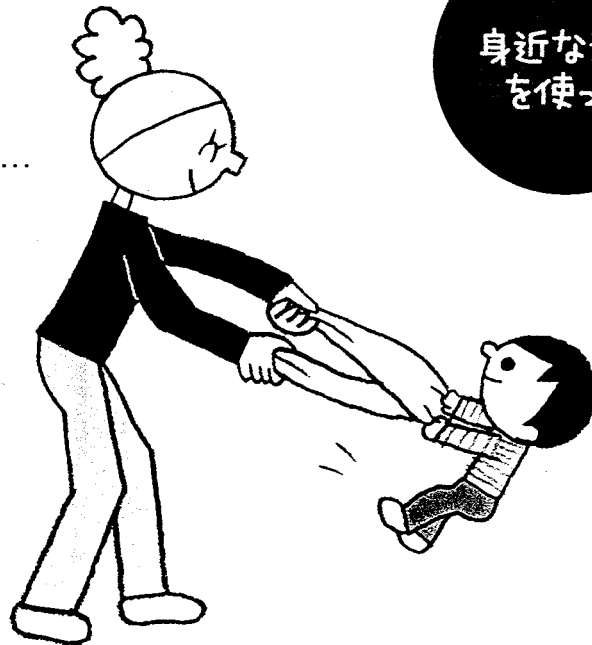
●親石からの脱出

子どもをうつ伏せに寝かせます。その上に親(大人)が覆いかぶさります。親は子どもが逃げないようにします。子どもは親の石から脱出するようにします。

タオル

●つなひき

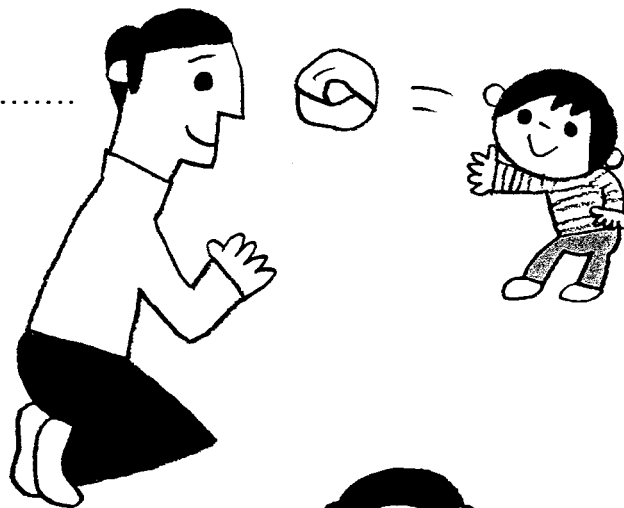
親(大人)はタオルの端と端を片手で持ちます。子どもは輪になっている中央を両手で持ち、親と子どものつなひきをします。線を決めたり、目的地までひっぱっていったら勝ち、など親子一緒にルールを決めてやってみましょう。力は大人が強いので、いろいろハンディを考えてあそびましょう。



ボールで
ゲーム

●タオルボールキャッチ 10

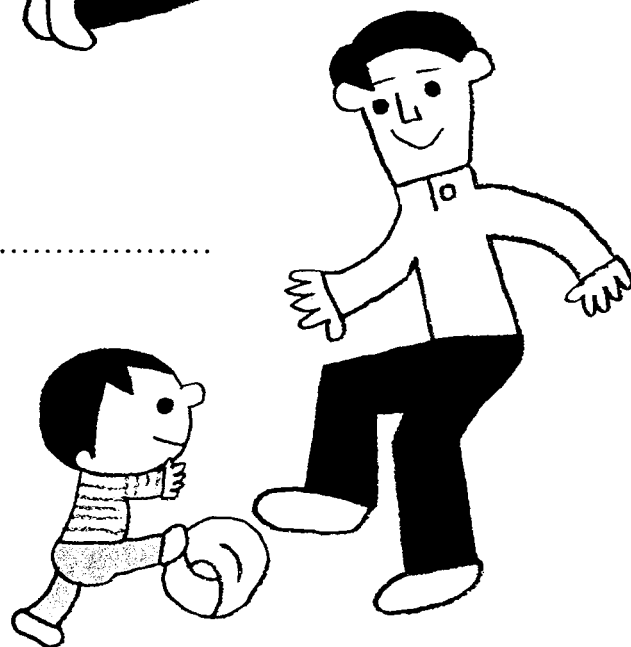
最初は下投げでもかまいませんが、いい機会なので野球投げの仕方を教えるのもよいでしょう。互いに「投げて捕る」の動作でどちらかキャッチで1回、投げて相手がキャッチして2回、といったように順番にキャッチボールしていきますが、途中で落としてしまったら、また1からというふうに10まで落とさないようにキャッチボールをします。下からパスのような投げ方や、片手、両手などの投げ方にも挑戦してみましょう。



ボールで
ゲーム

●ドリブルキング

タオルボールを床において、サッカーのように手を使わずボールを取りっこするあそび。親(大人)は足のインサイド、アウトサイド、つま先、踵など、いろいろな足の部位を使って子どもに取られないようにします。子どもはイライラして手で取ろうとしますが、最初はOKとします。子どもが捕ったらがんばって親に取られないようにします。



身近な道具
を使って

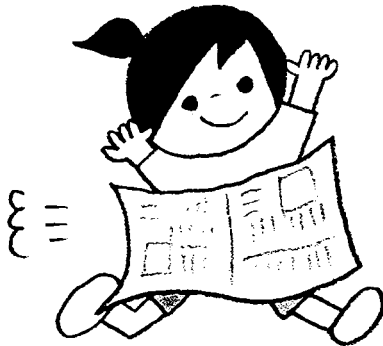


新聞紙

●新聞紙ジャンプ

新聞紙を折り、床におきます。新聞紙に乗っからないようにジャンプします。最初は小さい大きさから次第に大きくしてやってみましょう。ジャンプの仕方は両足ジャンプ、前跳び、後跳び、横跳び。

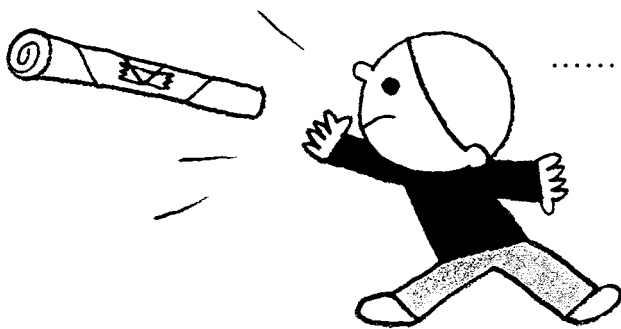
次に新聞紙の一边と一边をまたぎます。上にジャンプして空中で足と足をくっつけてから、開いて着地します。これができたら、次は跳んだときと違う一边と一边に着地します。



新聞紙

●腰巻きダッシュ

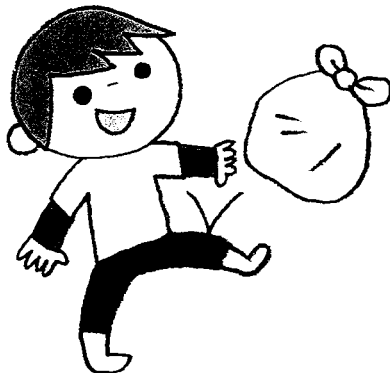
新聞紙を開き（子どものおなかの大きさに合わせます）、バンザイの姿勢で（手で押さえたり脇で新聞紙を挟んだりしないで）走ります。速度が速いと床に落ちませんが、遅いと落ちてしまいます。



新聞紙

●やり投げ

新聞紙を筒状にしてセロテープなどで止めます。やり投げの持ち方でどれだけ遠くに投げることができるか距離を競います。



スーパーの
ビニール袋

●リフティング

2歳児で使ったように、袋に空気を入れ、把っ手を縛り、ボール状にします。サッカーのリフティングの要領で片足ずつ床に落ちないようにボンボンとやってみましょう。足では落下速度の遅いビニール袋でも難しいもの。最初は手でバレーボールのレシーブのようにしてもOKです。

こども活動エリア

10 F

パソコンルーム

5 F

屋上遊園/プレイポート
ふしが丘

4 F

音楽ロビー/A・Bスタジオ
ビデオライブラリー

3 F

造形スタジオ/プレイホール

1・2 F

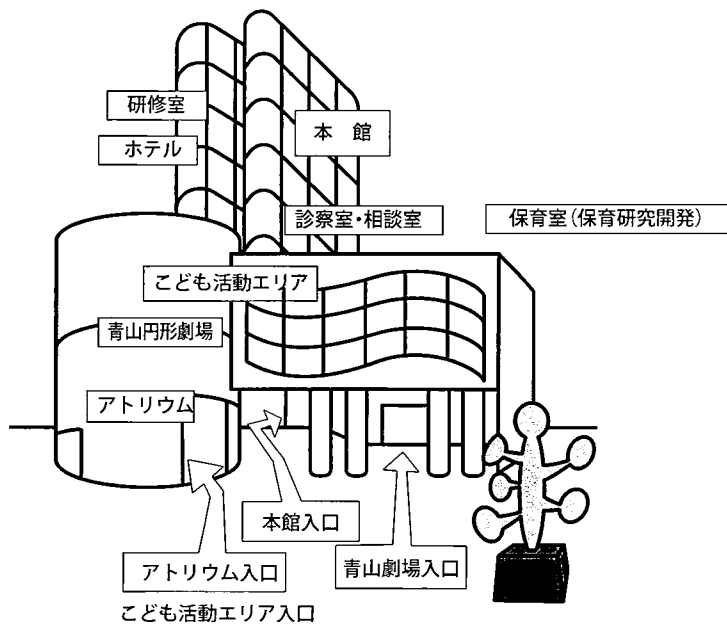
アトリウム・ギャラリー

B1 F

フリーホール

B2 F

体育室/健康開発室/プール



こどもの城について

こどもの城は1979年の国際児童年を記念して、当時の厚生省が構想した「児童の心身の健全育成」を図る総合児童センターです。厚生省の委託を受けて、財団法人児童育成協会がその運営に当たっています。

次代を担う子どもたちに、その自主性を尊重しつつ、遊びを中心としたさまざまな体験の場を提供することによって、「心身ともに健やかに育成し、その資質の向上を図る」ことを運営の基本としています。そして、日常的な一般活動を基盤としながら、常に先駆的で実験的なプログラムを企画立案し、その独自の情報やプログラムを広く全国に普及させていくことにも重点を置いています。また、国際的な視野にたち、世界各国の子どもたちと文化活動を通じて交流を図ることなど、全国にある児童館の拠点としての役割を果たすことを活動の目的としています。

こどもの城では、「子どもたちの心身の健全な育成」という課題に対し、「こども活動エリア」と総称される体育・プレイ・造形・音楽・AVの5つの部門を設け、子どもたちが楽しみながら、さまざまな体験をすることができるようにそれぞれ専門性を生かしたプログラムを実践しています。

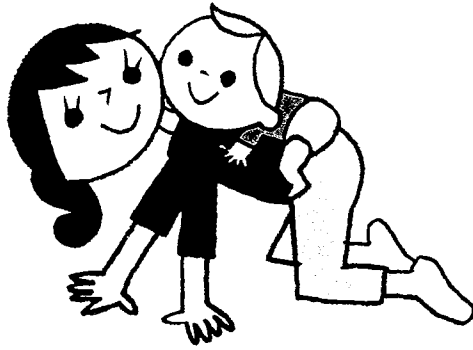
また、その他の関連部門として育児支援のための保育や小児保健、ボランティアや児童厚生員の研修などを担当している企画研修、劇場などの部門を設け、これらの部門が協力し、年間を通じてさまざまな児童の健全育成のための事業を実施しています。そして、20年以上の実践活動の歲月のもとで培われた経験や知識、それを基盤とするプログラム作成のノウハウが成熟し、蓄積してきたため、全国の児童館や児童施設と連携・協力して、これを全国に普及していくという当初からの目的を実現できる基盤ができました。

動くこどもの城とは

前述のように、こどもの城では開館以来、体育・プレイ・造形・音楽・AVなどのいろいろな分野の専門スタッフが協力して、常に新しいプログラムを研究開発してきました。運動体験を通して心身の健全な発達を図るプログラム、遊びを通して対人関係などの社会性を獲得するプログラム、造形活動から色彩感覚などの造形的感覚を養う体験プログラムや制作プログラム、音やリズムを媒介とした音楽体験プログラム、映像の原理を体験的に知り、映像表現をするアニメプログラムなどさまざまです。そして、これらのプログラムを年間100万人を越える来館者に提供し、その実践活動をフィードバックしながら、先駆的な活動のための新しい礎となるような貴重な知見を得てきました。

これらの結果をふまえ、こどもの城では、国立の総合児童センターとして、情報発信機能を充実させていくために、その成果を全国の児童館などに普及していきたいと考えています。また、それをきっかけにして、現在の児童館のあり方や児童館に求められているものについて、児童館で実践活動を続けている児童厚生員などの方々と情報を交換したり、共同研究を進めていきたいと考えています。

このような方針に基づき、「動くこどもの城」事業の構想が生まれました。この事業は、こどもの城で研究・開発・実践してきたプログラムを各地の児童館などで実施するとともに、そのプログラムの背景にある理念や考え方を児童厚生員などの方々に紹介していくものです。そして、平成6年度から国の助成を受けて、実施し続けています。こどもの城では、ナショナルセンターとして、この事業を通じて全国的な規模での児童館活動の活性化のために貢献していきたいと考えています。



●こどもの城